
魔導書の門番

大田功介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導書の門番

【Nコード】

N5354Y

【作者名】

大田功介

【あらすじ】

主人公ミレリア・ハートンはある事件に巻き込まれる。その時、彼女はある男に会う。その男にある決断迫られる。それは、彼女の運命変える決断だった。

はじまりの出来事？（前書き）

よろしく願います

小説は初めて書くものです

はじまりの出来事？

彼女は戸惑った。ついさっきまで、みんなが盛り上がった体育祭が戦場になったからだ。

楽しかった生徒の笑い声は、悲鳴や奇声に変わり、教職員はそれを止めることなく自分たちもこの戦争に参加していた。

そう、今この体育祭は生徒や教職員らの殴りあいによってしまったのだ。理由は彼女も分らなかった。

ただ、分ることは、ここは彼女の知る体育祭ではないことだけだった。校庭には返り血が飛び散り、

教職員のテントも倒れてしまった。すでに何人かの生徒は気を失ったり、倒れたりしていた。

「こんなのどうして・・・みんなしっかりしてよ」彼女は泣きながらみんなに叫んだ。しかしみんなの奇声や悲鳴の声で彼女の言葉は届かなかった。そもそもこのような彼らの狂気の前で例え彼女の声が聞こえたとしても、彼らの心に届くかはかなり難しかった。彼女の訴えも意味なく、殴り合いはさらに激しくなった。またひとり、またひとりとどんどん倒れていった。その中に見覚えある女の子がいた。茶髪の彼女にいつも隣についてくる姉妹のように仲良かったレニユちゃん！

彼女は急に顔を青ざめてレニユちゃんに駆け寄った。「レニユちゃんしっかりして、どうしたのレニユちゃん」彼女は必死でレニユちゃんの体を揺する。しかし冷たくなった彼女の体に触れたとき、彼女の顔が歪んだ。初めての人の死、初めての友達の死、手を握ると温かいぬくもりは冷たく変わってしまった。

きれいなピンクの髪の毛さばさになり、目には生気がなかった。彼女は友達の死が衝撃過ぎたのか、校庭で吐いた。そして自分もこの汚物のように、吐きだされたいと神様に願った。しかしその願いも生徒たちの狂気や奇声でかき消された。彼女はもう半ばこの状態

を収拾をあきらめたとき、一人の冷たい男が立っていた。

はじまりの出来事？（後書き）

いろいろと文章的におかしいところがあったら教えてください
後、感想とかも書いてくださると幸いです

はじまりの出来事？（前書き）

二作目です

かなりごり押しです

誤字、脱字など見つけたら教えていただけると幸いです

はじまりの出来事？

そのとき、一人の男が彼女の前に立っていた。その男の黒いコートを着ていて、学校の関係者ではないの是一目了然だった。また、教師のように温厚なイメージはなく、むしろ殺人者や暗殺者ような刃物のような寒気を彼女は感じた。男はこの戦場のような体育祭を前に少しも気にせず、彼女のほうに歩いてきた。男の暗くするどい目は彼女に向けられた。その時、彼女は、直感的にこの男が体育祭を戦場変えたと感じた。またこの男をここで始末しなければならぬと悟った。彼女は近く落ちてあった。金属バット拾い、男に大きく振りかぶった。しかし、男は金属バット避けず、片手で受け止めた。まるで、何事もなかったように、「とても興味ぶかい。この結界の中にいながらこの結界の干渉を受けてない・・・君は一体何者だ？」暗く低い声で、彼女に男は問いた。彼女は、憎悪の目を男に向けて、「あなたこそ誰よ！こんな楽しい行事を戦場に变えて、何がしたいのよ！」涙を流しながら彼女は男に訴えた。男は、少し困った顔をして「それは誤解だ。私はここに結界なんか張ってはない」彼女に言った。「なら、誰がこんなひどい事をしたの？」「魔術師だよ。」「魔術師？」彼女は現実味のない答えに聞き返してしまった。男はそれが面白かったらしく苦笑して「そう、魔術師。理から外れた悪魔の叡智を司るものだよ。」「なるほど、魔術師なら結界とかも張れるね」彼女もさつきよりは、冷静さを取り戻してたのでこの男の話をだいぶ理解することができた。彼女はさつきのような憎しみはなかったが目で男を睨みつけながら「単刀直入で聞くよ。あなたも魔術師なの」男は無表情で「そうだ。魔術師だ。」と彼女に言った。彼女はまた男に「あなたは本当に学校に結界を張ってないのね？」同じことを尋ねた。「有無、この結界は作りがいいが秘匿が甘い。私ならもっと完璧な結界を作る自信はある」無表情で男はつぶやいた。もともと結界とは、現実を魔の術で仕切り、異界を作り

あげる。異界に入ったものはその世界の住人ならなければならない。例えば、この結界は狂化と生贄で構成されている。なのでこの校庭にいる生徒は、狂いながら力尽きるのは、そのためである。「なら、あなたはここに・・・何しに来たの？」彼女のその問いを男が待っていたように冷酷に笑いながら「悪い魔術師を懲らしめに来たんだよ。」男は校庭の中央に刺さっている。青い杭を引き抜いた。その瞬間に生徒たちの悲鳴や奇声がなくなった「終わったの？」彼女是不安そうに男に尋ねた。男は首を横に振りながら「まだだ・・・私は柱の一本を抜いただけだ。今から敵の本拠地に行く。君も来るか？」彼女は戸惑った。もともと自分はこの男を信用してない。その男とともに行動するのはかなり危険だろう。しかし、彼女は自分の親友を殺した犯人の顔が見たかった。そしてなんか一言言いたかった。「敵の本拠地に行けば結界は完璧に壊れるの?」「左様、それは私が保証する」男の顔は、嘘をついているようには見えなかった。「なら、私も行くよ」学校では見せたことのないような真剣な顔で男につぶやいた。男は彼女の顔を見て笑みを作り「よろしい。我名は、サオ・クロミア」と彼女の前で言い、軽く会釈した。彼女も会釈を返し「ミレリア・ハートンだよ。・・・ミレリアでいいから」とミレリアはサオに自己紹介をした。「承知した。行くぞミレリア」男は後ろにいるミレリアにそう叫ぶと一人で歩いていった。ミレリアもサオを見失わないように後を追いかけた。

はじまりの出来事？（後書き）

今日からテストがほぼ一週間前です。
それでも書けたら書いてゆくつもりです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5354y/>

魔導書の門番

2011年11月27日08時48分発行